

ソ聯の抗戦力に関する分析
上

332.38
To 24
ハ ウ

332.38-To24-(1)ウ
76#10212



始



591



資料

第七四號

ソ聯の抗戦力に
關する分析 (上)

調 査 部

東方問題研究所

26. 1. 22

332.38
7025
(4)

ソ聯の抗戦力に關する分析 (上)

調 査 部

(一) 序説 ソ聯の見方

謎のロシアと云ふ言葉は、決して耳新しい言葉ではない、否、歴史的に見て、相當世界の諸民族の耳朵には親しみ易い、聞き馴れた言葉であると云へる。然し乍ら、ロシアが謎であると云ふ言葉に依つて意味される所の事態は、一九一七年の十月革命前までは、ロシアの歴史的在り方が世界的に見て一種獨特であつて常識的分析を容易に許さないと云ふに止つて、必ずしも、國力が偉大であるとか、民族としての底力が端睨を許さない程に強靱であるとか云ふ事ではなかつた。其の意味に於いて、ロシアは謎であると云ふ言葉の意味する所は、支那が謎であると云ふ場合と大分似通つてゐたと考へられる。そして、實際、ロシアは、近代に入つてから、二回、其の實力をテストされてゐる。第一回は日露戦争であり、第二回は第一次世界戦争であり、ロシアは此の二回に亘る大試験に於いて、見苦しき敗戦を喫したのである。即ち、此の二回の國力テストを通じてロシアの謎的性格は白日の下に暴露され、ロシアの近代的戦力は必ずしも恐るゝに足りないといふ観測が一般化され、其の限りに於いて、近代ロシアは謎でないと云ふ事になつた。従つて、此の場合、ロシアは謎であると云ふ表現は幾分輕蔑的な意味合すら含む様になつたのであつて、ロシアは世界の六分の一に餘る尤大なる國土を擁してゐる事、民族的構成が極めて複雑であつてヨーロッパ的な血とアジア的な血とを共に含んでゐる事、民族の耐乏力が極めて強靱であつて（此の點に於いて支那民族に似てゐる）如何なる壓制の下に於いても平氣で生き残ると云ふ事、更に民族の増殖力が殆んど動物的と云はれる位に猛烈であつて如何なる惡環境の中でも生活し続けると云ふ事、歴史あつて以來未だ一度として完全に征服された事がないと云ふ事、——凡そ斯う云つた様な意味に於いて謎であつたのである。

然るに、一九一七年の十月革命以來、ロシアは謎であると云ふ言葉の持つ意味は大

76W10212



分獲つて来た。資本主義的發展に於いて非常に後れてゐたロシアが一足飛びに徹底した社會主義に轉入したと云ふ事が第一に謎であつた。更にロシアの眞意は果して世界革命にあるのか或は一國社會主義の建設にあるのかが不明であつた。革命の建設途上に於いて何故曾つての同志を大量殺戮しなければならなくなつたかと云ふ事も謎であつた。然し乍ら、最も大きな謎は、資本主義的發展に於いて非常に後れてゐたロシアが革命以來二十年にして今や押しも押されぬ重工業國になつたと云ふ事、科學的教養が淺く農民的イデオロギーの濃厚なスラヴ民族が計畫經濟と云ふ極めて科學的な仕事に着手して一應の成功を示してゐると云ふ事、計畫の立て方が非常に科學的であり進歩的であると言ふ事、最後に、社會主義は經濟計算の見地から不可能であると云はれてゐるにも拘らず、ソ聯に於いて一應の成功を収めてゐると云ふ事でなければならぬ。革命後に於けるロシアの國力は幾多の局地的小競合(例へば、ノモンハン事件の如き)に於いて其の片鱗を示したに過ぎなかつたが、第二次世界大戦はロシアの戦力が今や全く恐るべきものである事を實證するに至つた。斯くて、ロシアからソ聯邦に移るに伴つて、ロシアは謎であると云ふ言葉の持つ意味は全く變つた。驚くべきは、スラヴ民族の動物的な増殖力とか耐乏力とかではなくて、彼等が極めて短期間に然も徒手空拳を以つて近代化を完了したと云ふ事でなければならぬ。驚くべき計畫力、恐るべき組織力——此の底力は一體、ロシアの何處から生れたのであらうか。之が近代ロシア即ち革命ソ聯の新しい謎でなければならぬ。曾つて、ロシアの謎は世界の人類學者、民族學者、歴史家にとつて、單なる學問的興味の對象であるに止まつてゐた。然るに、今日、ソ聯の謎は單なる學問的興味の對象ではなくて、世界政治的重大關心の對象となつてゐる。此の謎を解く事なくして明日の世界を語る事は無意味であり、ナンセンスであらう。敵であれ、味方であれ、増殖力に於いて世界無双の二億の人口巨塊が世界陸地の六分の一を占據してゐる然かも總ての重工業資源の埋藏がアメリカを凌ぐ位に豊富であり、且つ、世界に全く新しい經濟體制を有つてゐると云ふ事實が明日の世界政治を動かす巨大なる原動力であると云ふ事をしかと認識しておかないならば、必ずや、重大なる結果を以つて償はれるであらう。

二年に餘る苛烈極りなき獨ソ戦は、ロシアは近代戦に於いては恐るゝに足りないといふ日露戦争或は第一次世界大戦當時のロシア觀を決定的に否定し去つた。獨逸の戦争指導者は世界に向つて從來の對ソ觀が全く誤つてゐた事を宣言し、武力戦だけでソ聯を屈服せしめる事は遂に不可能である事を自認するに至つた。第一次世界大戦當時と比べて見るならば革命後に於けるロシアの足跡が如何に偉大であつたかハッキリ判るであらう。

1012
150

それならば、ヒットラーの電撃作戦をして一敗地に塗れしめた所の、ソ聯の抗戦力は一體何處から湧いて来たものであらうか。我々は最早や謎であると簡單に片付けるわけには行かない。我々は此の謎の實體を突きとめなければならぬ。我々は、敵であれ味方であれ、此の二億のスラヴ民族と常に何等かの形で接觸して行かなければならない。こちらは如何に遠ざからうと努力しても先方は遠慮なく接近して来る。これが世界史の奇しき宿命である。ソ聯はタブーであつてはならぬ。我々は欲すると欲せざるとを問はず、此の謎の面を剥ぎとらねばならぬ。然らざれば、我々は後日重大なる結果を以つて償はれる事必定である。故意の怠慢は必ずや世界史の神に依つて罰せられる。我々は、獨逸の轍を踏んではならない。偉大なる失敗者の肺肝から出た言葉の傍を通り過ぎてはならない。

斯くて、ソ聯の謎を謎として放つておけない事は、今や全く明らかである。問題はソ聯の謎を分析する事が果して可能であるかどうかと云ふ事である。此の點に就いて我々は斯う考へる。太陽の下には新しい事は無い。曾つて有つた事は今日も有るだらうし、今日有る事は將來も有るだらう。ソ聯を謎と見るのは、研究が足りないか、研究の方法が誤つてゐるからであらう。自分の頭が複雑怪奇に出来てゐると、現象それ自身が複雑怪奇であるかの如き錯覺が起り易い。我々は先づ頭の曇りを取り除かなければならぬ。

然らば、頭の曇りを取り除けるとは、具體的には如何なる事を意味するであらうか。我々は、茲で、ソ聯研究の方法論に觸れざるを得ないであらう。我々は、ソ聯の謎を解くには、ソ聯に關する正しい考方、見方、研究方法を確立しなければならぬ、ソ聯の指導者の書いたものとかソ聯に關する事情通の紹介を讀む前に、正しい讀み方を確立しなければならぬ。書物を讀む前に、正しい讀方がなければならぬ。然らば、正しい讀方とは一體何であるか。此の點に關し、我々は次の様に考へる。

ソ聯の抗戦力を科學的に分析、検討するには、次の四つの點に於いて正しい分析の

仕方が確立されなければならぬ。

(一) ソ聯經濟の運營の仕方それ自體を研究する事

(二) イデオロギイの見方の清算

(三) 歴史的見方

(四) 世界的見地

(一) ソ聯經濟運營の研究

ソ聯の抗戦力に關する研究は、從來企圖されなかつたわけではない。特に我國に於いては、日露戰爭以來、ソ聯に關する關心は相當強く、今日迄相當貴重なる研究が發表されてゐる。勿論、其の中には、或る事情で公表されなかつたものも相當有る。然し乍ら、此の種のソ聯研究に共通の缺陷は、研究の重心が數字として現れる生産力とか資源とかに限定されてゐると云ふ事である。確かに、ソ聯の重工業生産力或は資源の埋藏状態を研究する事は、抗戦力の研究として重要である、重要であるばかりでなく此の種の研究は、資料其の他の點で比較的容易である。我國に於けるソ聯研究が從來主として此の方向に走つてゐたと云ふ事は、十分納得出来る。然し乍ら、生産力研究、資源研究は、抗戦力に關する研究の初歩的段階であるに過ぎない。例へば、生産力の研究は、結果の分析に止まつてどうして斯く斯くの結果が出て來たかを追求しない。我々は、ソ聯の製鋼能力が二・〇〇萬トン、精油能力三・〇〇萬トン、自動車生産力二〇萬臺、戦車六萬臺、航空機五萬臺であると云ふ事實を知つただけでは決して十分ではない——勿論、知らないに勝ること萬々であるが、我々には、更に竿頭一步を進めて、ソ聯が如何にして斯かる重工業生産力の水準に到達する事が出来たか、再生産の仕組がどうなつてゐるかを研究する必要がある。資源研究にしてもさうである。ソ聯は、今日までの調査に據ると、殆ど總ての資源を極めて多量に埋藏してゐる。或る種の資源——例へば、水力、森林、石炭、石油の如き——に於いてソ聯はアメリカを凌駕してゐる。クヅネットク炭田だけで實に四・〇〇億トンの確定埋藏量があると云はれてゐる。眞に驚くべき事實である。ウラルの鐵礦、クヅネットの石炭を中心として茲にウラル・クヅネット重工業地帯が生れた事、周知の如くである。八幡の製鐵所見たいなものが此の一帶にゴロゴロしてゐるのである。

然し乍ら、資源研究だけでは畫龍點睛を缺くの憾みがある。勿論ソ聯の重工業的發

展の背後に無盡藏に近い重工業資源が有る事は忘れてはならぬ。然し乍ら資源の埋藏状態は調査が進むに伴つて變化する。特にソ聯の如く尨大な國土に於いては、三年前の資源調査は既に古い。大事な事は、然し乍ら、資源があると云ふ事ではなくて、資源を掘り出して有用物に轉化するための資本經營技術がどうなつてゐるか云ふ事である。近代的化學技術は從來無價値であつた資源を有用資源に轉化し、反對に、從來有用であつた資源を無價値にする。問題は、資源それ自體ではなくて、資源を活かす技術、經濟でなければならぬ。然も、此の技術の點に於いて、ソ聯は、今日、アメリカ、獨逸の水準に肉薄しつゝあるのである——或る種の技術に於いては既に追越してゐる。我々は、鐵の生産力がどうであるとか鐵の資源がどうかを研究すると共に、更に一步を進めて、鐵の資源を利用する技術がどうかであるか、如何にして短期間内に尨大なる鐵生産力に到達する事に成功したかを問題にしなければならぬ。此の後者に關する研究が從來ともすれば妙な眼で見られたと云ふ事、爲めにソ聯の抗戦力に關する正しい研究が抑制されたと云ふ事は、伸び行く日本にとつて極めて残念な事であつた。

(二) イデオロギイの見方の清算

社會主義は勿論、一つの新しいイデオロギイである。イデオロギイとしての社會主義は明らかに、資本主義と對立する。従つて、イデオロギイとしての社會主義が道徳的價值判斷の對象になると云ふ事は、實踐的には不可避的自然發生的であるばかりでなく、學問的にも正しい事である。斯くて、ソ聯邦の社會主義イデオロギイが倫理的批判の對象として論議されると云ふ事は、何等異とするに足らない。然し乍ら、ソ聯の抗戦力を研究する場合にイデオロギイ論を持込むと云ふ事は、決して正しい行方ではない。それは次の二つの點に於てである。第一に、社會主義單なるイデオロギイではなくて既にソ聯と云ふ社會的、政治的現實地盤の中に根を下した所の現實的な事柄である。我々は、一つのイデオロギイが單なるイデオロギイとして止まつてゐる限り、自由に論議し、批判する事が出来る。然し乍ら、新しいイデオロギイが歴史的現實となるや否や、斯かる道徳的批判を繰返す事はナンセンスであらう。それは、善かれ悪かれ、既に一つの歴史的現實であり、従つて歴史的效驗を有つてゐる。此の場合斯かる新しい歴史的現實の背後にあるイデオロギイを取り出して來て批判を試みる事

は無意味であつて、我々は、正しくは、之に依つて捲き起こされる歴史的効驗 (Historische Wirkankait) を經驗科學的に分析し、追求すべきである。

第二に、イデオロギーと之に對應する歴史的現實との間には、常に一定の距離がある。イデオロギーは無遠の彼方にある理想點であるが、歴史的現實は此の無限遠點に向つて漸近する現實點である。イデオロギーは變らないが、歴史的現實それ自體は不斷に生々發展する。従つて歴史的現實の分析にイデオロギーを挿入し、往々にして、收拾すべからざる思想的混亂が起る。我々は、ソ聯の社會主義に於いて特に此の感に深くする。第三に、我々がソ聯の社會主義經濟を研究する場合の主たる關心は、社會主義が我々日本民族に對して如何にあるかと云ふ事ではなくて、社會主義がソ聯の諸民族にとつて如何にあるかと云ふ事ではない。従つて社會主義イデオロギーに對する日本の價值判斷を挿入し、研究の方法として既に誤つてゐるばかりでなくて、斯かる混亂せる研究からは國策決定上何等の現實的効用も引き出されない。斯かる研究は無益である上に有害である。

第四に、社會主義は單なるイデオロギーではなくて一つの經濟體制である限り、明らかに、資本主義と異なる所の再生産構造、經濟計算の構造を有たなければならぬ。ミーゼス以來、社會主義は經濟計算的に不可能であると云ふ有力な意見がある事周知の事柄に屬する。學問的には或はさうであるかも知れない。然し乍ら、ソ聯は、學問的に不可能なりと判決された經濟計算を實踐的に解決しつゝある。我々は決して此の點に於いてソ聯が成功したとは言はないが、ソ聯が革命以來此の問題を實踐的に解決するために全知全能をあげて總動員してゐると云ふ事、其の努力が完全と云ひ得ないまでも或る程度成功してゐると云ふ事は否定出来ない所であらう。ソ聯の抗戰力を研究すると云ふ事は、必ずしも鐵がどうだ石炭がどうだと云ふ事の研究に盡さるものではなく、ソ聯の社會主義經濟に於いて經濟計算が如何にして解決されつゝあるかと云ふ事に研究の重點が向けられなければならない。従つて、飽くまでも經驗科學的な研究が主たる關心であるから、此の場合、イデオロギー論を挿入し、無用の混亂を約束するに過ぎない。

(三) 歴史的見地。

イデオロギーとしての社會主義は變らないが、歴史的現實としての社會主義が歴

史的に變遷する事は、既に述べた様に、明らかなる事である。後述する様に、ソ聯の社會主義經濟は、一九一七年十月革命以來、幾多の變遷を経て今日の段階に到達してゐる。其の變遷の仕方は極めて顯著である。革命直後の所謂戰時共產主義時代のソ聯邦と二〇年を経過した今日のソ聯邦との間には進化とか發展とか云ふ言葉を以つてしては十分其の意味を盡し得ない程の大きな變化が見出される。例へば、貨幣と企業の獨立採算の否定から出發した戰時共產主義は悲慘なる失敗に終り、一九二〇年後の新經濟政策時代に入つてからは、計畫經濟運營の鍵を貨幣と企業の獨立採算制 (ハズラスチョート) に認めざるを得なくなつてゐる。新經濟政策の精神は今日も尙生きてゐる。斯くて、今日のソ聯の計畫經濟は社會主義經濟と云ふ言葉に依つて一般に意味される所とは大分異つてゐる事を考へる必要がある。若し、此處にイデオロギー論を挿入し、我々は、大きな、取返しつかぬ見當違ひを犯すであらう。

(四) 世界的見地。

ソ聯は世界の他の國々とは全く違つた經濟體制を有つ國ではあるが、然し乍ら、ソ聯は孤立國ではない。ソ聯は、其の指導者が口癖の様に言つてゐる如く、資本主義列強に依つて包圍された國である。ソ聯を圍繞する世界の呼吸は其の儘、ソ聯の現實政策の中に反映せざるを得ない。ソ聯としては、世界革命の理想はさる事乍ら、此の理想を實現するためには、其の時々に於ける世界の政治的情勢に即應しなければならぬ。世界の息吹きを身近かに感じないわけには行かない。斯くて、往々にして、パラドキシカルな事態が現はれる。此の理想と現實との一見相對立するが如き矛盾は、我々の知れる限り、次の二つの機會に於いて現れてゐる。一つは、世界革命と一國社會主義建設との對立であり、今一つは、最近に於ける世界共產黨の解散である。此の二つの顯著な機會に於いて、卒然として之を見れば、世界革命の理想は世界政治の現實に依つて否定された如くである。果して斯く考へる事が妥當であるだらうか。

我々は、此の場合、徒らに現象的、表面的事實の中に沈潜して自らの視界を狭くするの愚を避けなければならない。我々は、現象の中にあつて然かも現象に流されず、一面に於いて現象を超越する立場をとらねばならぬ。換言すれば、我々は、ソ聯を夫自身としてでなく、世界との交互關聯、交渉に於いて把へなければならぬ。世界政治の一環としてソ聯を眺めなければならない。ソ聯は自らの中に世界を宿してゐる。

我々はソ聯の中に世界史の意圖を見る事が出来る。ソ聯は歴史的世界、世界史的世界の自己運動の一つの環である。勿論、ソ聯と世界との關係は、世界からソ聯への働きかけと云ふ一方的作用に盡きるものでなくて、兩者の間には不斷の交互作用がある。世界はソ聯に働きかけ、ソ聯は獨自の仕方に於いて世界に働きかける。ソ聯をソ聯とも含む世界の自己運動の一環として見ると云ふ場合、以上二つの作用は共に含まれてゐなければならない。

ソ聯を世界の自己運動の一環として見る事に依つて、理想と現實との表見的矛盾は必ずしも矛盾でない事が明らかとなるであらう。大洋を航海する以上何人も完全な無風状態を想定する事は出来ない。船の航路は現實的には正常のコースから離れるであらう。然し乍ら、それにも拘らず船は一定の目的地に向つて進むのである。目的地を見失つて了ふのは、暴風に依る航路の變更と云ふ現象的事實にこだわり過ぎるからである。

以上、ソ聯の正しい研究の仕方に就いて述べた事柄は、實は、必ずしもソ聯の研究に限らない我々はアメリカを見、獨逸を見る場合に於いても、全く同じ様な心構が必要であらう。唯、ソ聯の場合に正しい研究の仕方が特に問題として取上げられるのはソ聯の經濟體制が我々の夫と全く異なる所の一種獨特のものであるからである。自分と全く違つた新しい世界を研究する場合、人は往々にして極端に走り易い。新しい物を頭から否定し去るか、或は、全く無批判的に心酔するか何れかである。然し乍ら此の態度は全く誤つてゐる。世の中には完全無缺なものは滅多にあるものではない。如何なる制度も、それが人間のものである限り、長所と短所とを共に含んでゐる。問題は長所が有るとか無いとか、或は、短所が有るとか無いとか云ふ事ではなくて、兩方をバランスして見て何れの制度が人間的な事柄として歴史的に持續する事が出来るかと云ふ事ではない。

ソ聯を正しく把握する事の必要は、特に日本に於いては、いくら強調しても強調し過ぎると云ふ事は無い。蓋し、日本人は、物事を世界的に考へるセンスを持合せてゐないからである。此の事は、日本民族が久しく東海の一孤島に世界史の主流から隔絶して生活して來た事に因るであらう。日本民族の島國根性は其の由來する所極めて深く且つ遠い。明治維新以來、我々は勇敢に海外の資本主義文化の吸収に努めて來たの

であるが、輸入されたものは單なる形骸だけであつて眞髓ではなかつた。我々は正しい自由主義、正しい個人主義を自らの血肉にする事に成功しなかつた。個人主義は日本に輸入されるや極めて下品な形に墮落した。個人主義とは、日本では、個人の氣儘氣隨であり、唯物的な立身出世主義であつた。自由主義に就いても同じ事が言へる。何れにせよ、我々は、今日に於いても尙、其の胴體に於いて中世に連なつてゐる。頭だけが近代で胴體は中世である。我々は茲に戰時統制經濟の破綻の眞の原因を見出すのであるが、此處では深入りを避ける。肝心な事は、正しくソ聯を把握するにめには島國的な、中世紀的な色眼鏡を取外して、世界的に物事を考へる鑑識眼を養はなければならないと云ふ事である。

我々は、嫌ひだからと云つて、ソ聯の正しい研究を怠るわけには行かない。こちらには嫌ひでも先方は勝手に近づいて來ると云ふのが、世界史の因縁である。敵であれ味方であれ、我々は二億の斯拉夫民族を無視して今後の世界に處して行く事は出来ない。我々は、獨逸の失敗を再演してはならない。失敗したからと云つて自分一人腹切ればそれで済むと云つた様な、生易しい時局ではないのである。我々は、一指導者の善意の過失が全民族の絶滅に依つて償はれる事を深く銘記すべきである。

(二) ソ聯計畫經濟の歴史的発展

經濟は生き物である。生き物であるから動く變化する。宛も植物が発芽し、生長し開花し、遂に死滅する様に、生き物である經濟を正しく把へるためには、従つて、經濟を運動的、發展的に見なければならぬ。然し乍ら、經濟は單に動くものではない。宛も植物が発芽、生長、開花、死滅の有機的生長の過程を通じて本質的には自己同一のである様に、經濟も亦、變動しつゝ持續する。事物を運動と持續の相に於いて把へる立場を辯證法的と呼ぶならば、辯證法こそは經濟を正しく把へる立場でなければならぬ。

此の事は一般的に妥當するが、特にソ聯の經濟に於いてさうである。ソ聯の經濟は一九一七年の十月革命以來、卒然として之を見れば、猫の目の様な烈しい變化を示してゐる。暴風のために身體の自由を失つた船の様でもある。然し乍ら、斯く見るのは近視眼的である。餘りに現象面の複雑多様な變化に幻惑されて、現象の背後にあつ

て持續する所の本質的なものを見失つてゐる。

然し乍ら、同時に、今日のソ聯の經濟を二〇年前の頭で判斷する事は、大いなる錯覺であらう。蓋し、ソ聯の經濟は、現象的には、二〇年前とは全く比較にならない位に變つてゐるからである。我々は、ソ聯の經濟を正しく把握するためには、運動に固着して本質を見失つてはいけぬ、同様に、本質に拘泥して歴史的運動を見失つてはいけぬ。我々は、本質の中に運動を見、運動の中に本質を見る辯證法的立場を貫き通さなければならぬ。

それならば、ソ聯の經濟は、二〇年の間に、如何様に變つて來たであらうか。我々は、大觀的に見て、次の三つの發展段階を區別する事が出来るであらう。我々は、此の三つの發展段階を區別する事に依つて、其處に變化しつゝあるものと、自己同一的持續的なものを見出すであらう。

第一段階 戰時共產主義時代(一九一七年十月革命より一九二〇年に至る期間)

第二段階 新經濟政策時代(一九二一年——一九二五年)

第三段階 社會主義と資本主義との辯證法的綜合時代(一九二六年——現在)

勿論、一つの段階から次の段階への推移は漸進的であつて、嚴格に時期的に區劃する事は困難であらう。唯、大觀的に見て、以上三つの段階に分けて考へる事はソ聯經濟の歴史的發展を概観するために有意義であると考えられるに留まる。以下簡單に、各段階の特色を規定しつゝ、一つの段階から次の段階への推移を跡づけて見たい。

第一段階 戰時共產主義時代

戰時共產主義時代の特色は、政治的には、革命直後の混亂時代、内亂と干渉戰爭の時代であり、經濟的には、徹底せる國家資本主義の時代である。換言すれば、色々の意味に於いて、此の時代は混亂時代であり、過渡的色彩が極めて強い。

此の期間に於ける當面の課題は、新しい經濟體制への移行を強力的に遂行しつゝ、如何にして赤衛軍への補給に遺憾なきを期すかと云ふ事であつた。そして、此處に問題の異常なる困難さが横つてゐた。

革命政府は以上の課題に應へるために一聯の強行措置を次々にとつた。曰く、土地の國有化、曰く、銀行の國有化、曰く、大工業の國有化。殆んど總ての大工業は、其の國民經濟に於ける重要度の序列とは無關係に、一率に社會化された。一九一八年五

月には砂糖工業が、次いで石油工業が社會化され、六月には、鑛山、冶金、纖維、電氣、木材、煙草、硝子、陶磁器、皮革、セメント、製粉、製鐵業が相次いで社會化された。斯くて、一九一九—二〇年の間に大工業の國有化は大體に於いて完了した。一九二〇年十二月現在、國民經濟最高會議は、企業總數の八〇%即ち四、五〇〇企業を統制するに至つた。

一方、新政權は、赤衛軍への補給を完遂するため、農業部面に於いて徹底せる強行措置を取つた。即ち、國家は、穀物取引を獨占し、農民の有する總ての餘剩穀物を徵發した。更に、「働かざる者は食ふべからず」のスローガンの下に、總ての階級に對する嚴格なる勞働規律を實行した。又、大工業のみならず、中小工業をも統制した。

以上の如き一聯の戰時共產主義的措置を強行する傍ら、新政府は、新しい經濟統制機構を組織する必要に逼られた。先づ、最高統制機關として國民經濟最高會議が一九一七年十二月に創立された。次いで個々の企業に對する生産課題を決定し、原料の配給を統制し、企業の計算を管理するために、最高會議の下に一聯の總管理局即ち、一元配給統制機構を作つた。

斯くて、新體制への移行は極めて短期間に強行された。徹底せる國家資本主義の體制は出來上つた。然るに其の結果は如何。食糧、石炭、燃料の不足は遂に飢饉的狀態にまで發展した。工業生産は概ね大戰直前の一〇—一五%に低落した。勞働者は浴々として農村に流亡した。勞働者の實質賃銀は戰前の三〇%、勞働生産性は二五%に減退した。國民經濟全體を通じて縮小再生産の轉落曲線を急スピード的に追跡し、生産力上昇への萌芽は何處にも見出されなかつた。斯くて戰時共產主義即ち國家資本主義は無殘に失敗した。

然らば、何故、戰時共產主義は慘憺たる破局に直面するに至つたか。これについては次の六つの理由を掲げる事が出来るであらう。

(一)國土の尤大なるにも拘らず交通機關が破壊された事。

(二)生産の基本的ファクターの不確實性、變化性。

(三)經濟統計の不正確性。

(四)協議制に依る無責任。

(五)官僚主義的停滯獨善

(六) 國庫補助金制をとつたため合理的な經濟計算の尺度がなくなつた事。

以上六つの理由の中、最初の三つは不可避的であつた。不可抗的であつた。従つて此の點に於いて國家資本主義の失敗を非難する事は適當でない。然るに、後の(四)、(五)、(六)は全く事情が異つてゐる。それは國家資本主義の本質に連なつてゐる。素人の官僚が國民經濟の運営を末端まで統制する場合、官僚獨善となつて事務が停滞し會議倒れて責任が何人にも歸屬せず、經濟計算が混亂し、遂に國民經濟が果てしなき縮小再生産の惡循環に轉落する事は不可避的であらう。假りに、(一)、(二)、(三)の事情が缺如してゐたとしても(四)、(五)、(六)の事情が存在する限り、ソ聯の國家資本主義が破産しないで済んだかどうかは、大きな疑問であらう。

戰時共產主義の失敗は、大きな示唆と教訓とを含んでゐる。議論は兎も角、世界に於ける最初の實驗は慘澹たる失敗に終つたのである。新政權の指導者は決して此の教訓の傍を歩き過ぎなかつた。彼等は失敗の由つて來る所以を虚心坦腹に反省し、批判した。既にレーニンは、身を以つて體驗した破局の眞只中にあつて、戰時共產主義的混亂の彼方に難局打開の新しい道を見出した。彼は此の再建への方向を次の七原則に依つて要約してゐる。

- (一) 生産と分配に對する嚴重な、全面的な、全國民的計算と統制の實現。
- (二) 勞働規律の肅正のための闘争。
- (三) 勞働生産性の昂揚と勞働の高度の組織化。
- (四) 工業に於ける社會主義的競争の擴大。
- (五) 出來高拂の實施と無差別勞賃との闘争。
- (六) 強慾者、怠惰者、投機者に對しては、教へ訓し、説得すると同時に、強制手段をも採用する事。

(七) 生産過程の指導は一人の主務者に委せて其の責任性を強化する(單獨責任の原則)と同時に、大衆の創意と自治とを廣く發達せしめる事。

彼は、右の七大原則を第一段階に於ける主要課題と規定してゐる。然るに先きに述べたる如く、現實は此の理想とは反對の方向に走つた此の點は措くとしても、七大原則が果して第一段階に於いてのみ妥當するかは疑問であらう。其の後に於ける發展は概ねレーニンに依つて敷かれた軌道の上を走つてゐる。レーニンの第一段階は一九二

〇年迄に終る筈であつた。然るに、事實上、第一段階は今日に及んでゐる。レーニンは恐らくは第一段階の彼方により進んだ段階を考へてゐたのであらう。茲にレーニンの夢があつた。スターリンも亦、機會ある毎に此の夢を説く事を忘れない。

第二段階 新經濟政策時代(一九二二—二五年)

戰時共產主義のみじめな破綻に焦慮した新政權は、轉換の必要に迫られた。時宛かも干渉戦争は止み、國內戦も一應片付いた。此の好機を掴んで新政權は新しい道の第一歩を踏み出した。新しい道とは何か。資本主義を一部分許容する事である。彼等は之を新經濟政策(New Economic Policy)——略稱ネップと呼んでゐる。

新經濟政策の下に次に述べる様な一聯の資本主義的要素が導入された。

- (一) 農産物徵發制の廢止(穀物税の創設)。
- (二) 小工業に於ける個人企業の許容。
- (三) 利權事業の創設。
- (四) 獨立採算制への移行。
- (五) 貨幣ルーブルの安定。

(一)に就いては、戰時共產主義時代に於いて、新政權は、赤衛軍への食糧補給と云ふ緊急の課題を解決するために相當無理な措置を強行した。建前は農民の自家用を差引いた残りの餘剩穀物を全部國家に強制徵發すると云ふ事であつたが、實際は農民の自家用食糧まで徵發された。其の結果、農民の農業生産に對する熱意は冷却し、農業生産は釣瓶落しに減退した。農民の不平、不満は全國に漲り、新政權に對する反革命的空氣が醸成された。此の空氣を見てとつた新政權は、革命が農村部面に於いて破壊する事を恐れて、一聯の妥協策をとるに至つた。穀物税(現物税)が創設され、租税として國家に納入した残りの穀物は自由に賣買出来る様になつた。其の結果、農業生産は日を追ふて増大するに至つた。斯くて、新政權の指導者は、農業こそは革命の最大の難路であり、農業に對しては工業に對するとは別個の措置が必要である事を實踐的に學びとるに至つた。此の農業に對する現實主義政策が、革命を成功に導くための一つの大きな支柱になつた事は、其の後に於ける發展に顧みて明らかである。

(二)、(三)に就いては特に説明を要しないであらう。重要なものは、(四)の獨立採算制への移行と(五)の貨幣ルーブルの安定である。戰時共產主義時代に於いては、國庫補助金制をとつた結果、企業は儲けても損してもよいと云ふ事になつた。勤勉と努力

に依つて得られた利潤は全部國家に徴收された。反對に、企業が怠慢と不注意に依つて赤字を出した場合、其の赤字は國庫補助金に依つて補填された。其の結果として、企業の成績に對する勤勞者の熱意は自ら冷却した。生産に對する熱意が冷却すれば生産が悪循環的に減退する事は、明らかである。蓋し、合理的な經濟計算の尺度或は物差がなくつたからである。

そこで國家の決定する生産計畫に對する企業擔當者の熱意を昂揚するためには、從來の國庫助金制を止めて、企業の採算を獨立せしめる必要があつた。ソ聯では、之を企業の獨立採算制(ハズラスチョート)と呼んでゐる。獨立採算制は、明らかに、資本主義的な計算制度である。資本主義の經濟計算を導入する事なくしては社會主義の成功は不可能である。斯くて、ソ聯は貨幣を廢止し、利潤制度を廢止すべしと云ふ戰時共產主義時代の左翼小兒病的な考方から、社會主義の經濟計算的基礎を確立するためには、貨幣ルーブルを安定し、企業を獨立採算單位にしなければならぬ、換言すれば、資本主義運營の極めて重要な計算制度を導入しなければならぬと云ふ考方に變つた。茲に問題の要點がある。

扱て、以上述べた様な一聯の資本主義許容政策をとつた結果はどうであつたか。ソ聯の統計に依ると、工業生産は次表の如く、急スピード的に上昇し、大戰直前の水準に肉薄するに至つた。即ち、一九一三年を一〇〇とする五ヶ年間の生産状態は次の如くである。

| | 一九一三年 | 一九二一年 | 二二年 | 二三年 | 二四年 | 二五年 |
|------|-------|-------|------|------|------|------|
| 全大工業 | 一〇〇 | 一九・五 | 二五・五 | 三九・一 | 四五・五 | 七五・五 |
| 生産手段 | 一〇〇 | 二一・〇 | 二八・一 | 四六・一 | 五〇・五 | 八〇・三 |
| 消費手段 | 一〇〇 | 一八・六 | 二三・八 | 三四・二 | 四二・〇 | 七二・二 |

一方、勞働生産高は、一九二五年には、大戰前の九二・三%に復歸し、勞働者數は一九二一年の一〇〇萬人から一九二五年には一九二萬人に上昇した。實質賃銀は戰前の九五%に復歸した。

斯くて、國民經濟は、戰時共產主義時代の縮小再生産の惡循環から、徐々に、擴大再生産の方向に進んだ。一九二三年までは、固定資本投資額は減價償却をカバーし得なかつた、即ち、固定資本の喰潰しが行はれた。然るに、一九二四年始から固定資本

投資額は減價償却を超過するに至つた(一九二四年には一億留、二五年は四億五千萬留)。これは、勞働生産性の昂揚獨立採算制への移行、豫算統制の強化、留の安定工作銀行信用の發展、之を要するに、新經濟政策に依つて、利潤が作出される様になつたからである。

以上の如く、新經濟政策に依つて一聯の資本主義導入工作を行つた結果、生産力は上昇曲線に轉じた。これは、明らかに、資本主義への妥協であり、退却である。然し乍ら、新政權の指導者達は單なる退却ではなくて、前進するための一時的な、作戦的な退却に過ぎないと考へてゐる。所謂、一步退却、二步前進である。彼等は、新經濟政策の本質を次の如く規定してゐる。「我々は準備が整はないうちに行き過ぎた。此の行過は訂正する必要がある。若干退いて自己の後方陣地の近くまで暫く退却して、都市及び農村に於ける既成要塞の襲撃を暫く止めて、之が長期包圍に轉じ斯くする事に依つて力を養つて、再び攻勢に出て國內の資本主義の殘渣を絶滅しなければならぬ」(レーニン)。

『新經濟政策はソ聯の特殊な政策であつて、指導權は國家の手中に把握しつゝ、資本主義を許容し、資本主義と社會主義とを闘争せしめつゝ、社會主義の勝利を計るのである』(スターリン)。

斯くて、一人の指導者は曰ふ。
「我々は一年間退却した。今、我々は、黨の名に於いて、退却はもう澤山だと言はねばならぬ。退却に依つて企圖された目的は達成された。此の時期は既に終了しつゝあり、或は終了した。今や、他の目的―力の再分配―が提起される。」
如何にも、生産の社會化、生産手段の所有の社會化に關する限り、退却は終了したと云へるであらう。然し乍ら、社會主義經濟を運營するための原則に關する限り、新經濟政策の精神は、却つて益々強化されなければならなかつた。そして、我々は、茲に世界史に於いて極めて興味ある事態に直面するのである。

第三段階、社會主義と資本主義との新たな綜合時代(一九二六年以後)
新經濟政策に轉換する事に依つて、既述の如く、生産力は一九二五年には、概ね大戰前の水準に復歸する事に成功した。然し乍ら、それは、新建設と云ふよりは、寧ろ復興であつた。例へば、一九二五年十月末現在に於いて、國營工場的全操業固定資本

の八九%は戦前に建設されたものであつた。特に、新經濟政策時代に於いては、輕工業の復興に重點が指向されたため、機械工業は舊態依然たるものがあつた。一九二五年に於いて、重工業は全工業生産の四三・四%に過ぎなかつた。ソ聯は、主として、農業國であり、輕工業國であつた。然し乍ら、ソ聯を資本主義國から獨立させるためには、ソ聯を重工業化しなければならない。一九二五年十二月第十四回黨大會に於いてスターリンは曰く、

「新經濟政策は一應成功した。然し乍ら、ソ聯は依然として農業國である——工業生産は全生産の三分の一に過ぎない。そこで、ソ聯を資本主義國から、獨立させるにはソヴェートの工業化が必要である。ソ聯を農業國から工業國に轉化せしめ自國の力で必要な設備を生産し得る様にす——茲にソ聯の基本方針の基礎がある。」

ソ聯を工業化するためには、重工業、重工業の中でも先づ機械工業を創出しなければならぬ。然かも、一方、資本主義國に依つて包圍されてゐるのであるから、出来るだけ短期間に急テンポで工業化する必要がある。斯くて、ソ聯は國家の總力をあげて、重工業化に向つて邁進するに至つた。

然るに茲に一つの問題があつた。農業國から世界一流の重工業國にまで發展するためには、尨大なる建設資金を長期に亘つて投下する事が必要である。外國資本を導入する事は一つの方法であるが、此の方法はソ聯では實際上、問題にならなかつた。そこで、結局、自分の腹をいためなければならなかつた。國民の勤勉と自己犠牲に依つて尨大な建設資金を蓄積し、捻出する外に道は無かつた。斯くて、ソ聯は、尨大なる建設資金を捻出するための源泉を國內に求めざるを得なかつた。動員された蓄積源泉としては、

- (一)國債の破棄
- (二)大工業の利潤
- (三)國營化された外國貿易、國營商業からの收益
- (四)國民大衆の貯蓄
- (五)農業部面からの國庫收入

以上五つの源泉の中、量的に見て特に重要なものは、(二)の大工業の利潤である。大工業の利潤は、新經濟政策の結果、逐年、増加した。一九二六年の利潤總額は六四二

萬留であつたが、二九年には一、一四〇百萬留に上昇してゐる。黨は、蓄積源泉を強化するため、節約のスローガンを掲げて、行政費を切り詰め、之に依つて浮いた資金は一コペイクと雖も重工業の建設に充當した。

黨は、重工業化を促進するため、工業及び農業部面に於いて社會化を強化しつゝ、他面、資本主義の運營原則をドシ／＼導入した。新經濟政策の精神は擴大され強化された。黨は利潤、即ち、企業勤務品の自主的な創意と工風に依つて得られる能率利潤の國家的意義を確認して、獨立採算制を益々廣汎な部面に導入し、強化した。利潤計畫を超過するために社會主義競争が導入され、原價引下運動が積極的に展開された。

要之、新經濟政策の精神は、決して一九二五年を以つて終つてゐない。社會主義は自らの存立の基礎を確立、強化するために、却つて自己の反對物である資本主義を攝取しなければならなかつた。人は茲に容易に社會主義の自己矛盾を見出すであらう。

然し乍ら、さう見るのは、近視眼的であり、非辯證法的であらう。資本主義と社會主義とは、普通考へられてゐる様に、絶對的に對立、矛盾するものではない。ソ聯に於ける二〇年の實踐は最も雄辯に此の事を證明してゐる。ソ聯の經驗は、資本主義的な經濟計算のシステムを頭から否定する所の國家資本主義——社會主義の小兒病的形態——が本質必然的に破産しなければならない事を物語つてゐる。ソ聯の計畫經濟を社會主義と云ふ一般概念に依つて規定する事は、誤つてゐる。我々が今日のソ聯に於いて見出すものは、社會主義ではなくて、ヨリ正しくは、社會主義と資本主義との綜合された形である。資本主義を正(テーゼ)とすれば、戦時共產主義は反(アンチテーゼ)であり、今日のソ聯的計畫經濟は、兩者の綜合としての合(ジンテーゼ)であらう。我々がソ聯を正しく把握するためには現實的、歴史的に辯證法的に見なければならぬと云ふのは、正に茲にある。我々はソ聯の二〇年に亘る苛烈なる實踐の中から、無限の教訓と示唆とを酌みとる事が出来るであらう。問題は決してソ聯に限らない。ソ聯の問題はやがて又、我々の問題であらう。(ツツク)

~~101~~
~~75~~

332.38
To24
(1) (7)

昭和十八年八月二十三日 印刷納本
昭和十八年八月二十五日 發行
(非賣品)
東京赤坂區溜池町三〇番地
發行人 永田正義
東京芝區南佐久間町一ノ七
印刷人 中川二郎
東京芝區南佐久間町一ノ七
印刷所 研文社
東京赤坂區溜池町三〇番地
發行所 東方問題研究所
電話赤坂(45)二二〇〇七番
出版文藝會會員番號二二〇二七

(東京二二〇)

終